

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 山口 卓夫

一、出生から終戦まで

私は、神山富士の麓、山梨県南都留郡福地村中曾根で生まれ、福地村尋常高等小学校を卒業後、家業である農業に従事。昭和十七（一九四二）年一月十日、召集兵として千葉県佐倉市歩兵第二六部隊に入隊。戦時編成後直ちに渡満、北支の山東省泰安「衣（ころも）」歩兵四五部隊第二中隊（奥中部隊）に同年二月十五日に転属。以来泰安において初年兵教育を終了。同年五月、第五中隊本部付を命ぜられ、中隊長鈴木中尉殿の当番兵勤務。成績優秀を認められ昭和十八年、師団司令部付となり、野戦軍需品倉庫の警備隊員として勤務中、昭和二十年一月、衣部隊が沖縄決戦の転出に当たり、私たちは朝鮮咸興警備に配属され、咸興

司令部警備中、昭和二十年八月十五日正午、天皇陛下の終戦の詔勅をラジオ放送で聞きました。私どもは司令部付でしたが衛兵勤務中でしたので、後で中隊長からその話を聞いても信じられず、「敵軍のデマだ、日本が戦争に負けるはずがない」と、そのまま警備を続けていました。しかし八月二十日の朝、私ども咸興司令部は敵（ソ連軍）の戦車に包囲され戦いも許されず、そのまま武装解除され、咸興の朝鮮人学校の捕虜収容所に抑留されてしまいました。

二、アルチョム収容所で酷使労働

昭和二十年八月二十七日早朝、東京ダモイ（帰る）だとの非常呼集に飛び起きて、旅支度をして千人程度の作業隊に編成され徒歩で二日間くらいの行軍。着いたところは興南という港街。その港からソ連の貨物船に乗せられ、「東京ダモイ」だと大喜びしていましたところ、船は一度日本海に出ましたが、夜中から一路北上し二日目に大きな

港に着岸。そこはあの有名なウラジオストックと
言う軍港だと教えられ、皆がっかりしました。
が、もうどうにもなりません。そこからソ連兵に
「ダワイ、ダワイ（早く歩け）」と銃で小突かれな
がら五十キロメートルも原野を歩かせられ、小さ
な街に着きました。そこはアルチョムという石炭
の生産地で、私どもと一緒に戦友は収容所近くの
石炭採炭の地下作業場で働かせられました。私も
最初は炭鉱で作業しましたが二カ月くらいで病氣
になり、軽作業者として集団農場（コルホーズ）
で働くようになり助かりました。

しかしソ連共産主義者はどんな仕事もノルマ制
で、「働カザル者ハ食ウベカラズ」だと言って、
身体が悪くて働くことができないう病人も「働きが
悪いから」と言って食糧を減らされるので、病人
はますます弱くなり、栄養失調症で亡くなる戦友
が続出しました。

アルチョム地方も冬期は零下四〇度となります
が、私どもは夏服のままの着たきり雀、それにソ

連製の防寒外套だけですのて身体じゅうが凍えて
硬くなり、眠くなって凍死したり凍傷にかかった
り苦労しました。また水が少なく入浴もできず、
シラミが身体じゅうが増えて寝るに寝られないく
らいで、そのため発疹チフスとかの伝染病が出
て、ソ連の所長から衛生管理が悪いと叱責されま
したが、どうすることもできませんでした。

また他の収容所では共産思想教育が盛んで、日
本の天皇制や革命の教育を強制したようですが、
私どもアルチョム収容所ではその活動が少なく、
「日本新聞」が配られても一度読んで、後はマホ
ルカ煙草の巻紙に使いました。

昭和二十一年六月頃からは農場手伝いでした。
大きい国营農場で、地方の女性作業員と一緒に働
き、馬鈴薯ポテトを盗んだりもったりすることが何よ
りの楽しみでした。

冬は伐採作業で、ノルマは二人で薪切り三立方
メートルでしたが、枝を燃やして暖がとれたので
助かりました。また山野には、野ブキ、ヨモギ、

アカザ等の食用山菜が多く、夏はこの葉を取って岩塩で炊いて空腹をしのいだものでした。

昭和二十二年十月末頃、私どもが農園で作業中、農場長から、「明日東京ダモイができるぞ」という話を聞いて驚きましたが、命令どおり、翌朝アルチョム駅で有蓋貨車に押し込まれ、一昼夜汽車の旅でナホトカ港に到着。ナホトカの収容所では、「これが日本人か」と思うようなキビキビした「日本共産青年同盟」とか言う行動隊員の宣教運動の特訓を受け、学習の結果、成績のよい者だけ日本に帰すのだと搾られたが、結局一カ月足らずの教育で終了。十二月二日、日本郵船の「山澄丸（二二二四人乗船）」でナホトカ出帆。同月五日、舞鶴港に上陸。夢にまで見た懐かしの日本に生きてたどり着くことができました。

三、子孫や国民に言い残したいこと

戦争の悲惨さを経験した者はもちろん、直接戦争に参加しない者でも、戦争の恐ろしさは身にし

みてわかっていると思いますが、世の中でこんな不幸なことはありません。

これからは絶対に戦争はしないで下さい。そして、家では父母を大切に、兄弟仲よく、仕事に励み、明るい家庭生活を築き、平和で豊かな世の中を守って下さい。

最後に、皆さんの御多幸を祈りながら私のシベリア労苦生活の報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 天野 蕃 太

一、出生から終戦まで

私は、大正十五（一九二六）年二月二十七日、富士山北麓の景勝地、山梨県南都留郡山中湖村平野で出生。村立平野高等小学校を卒業。昭和十六（一九四一）年三月、茨城県内原満蒙开拓義勇軍訓練所に入所、幹部養成所卒業。昭和十八年三